

*Beowulf*における「毒」： Grendel の沼は毒のある場所か？

福 田 一 貴

古英語作品にでてくるある表現と他の作品にでてくる表現との類似性に着目し、その古英語作品が影響を受けたと考えられるラテン文学、聖書等の典拠を求める研究はこれまでに数多くなされてきている。これらの研究は、古英語作品に様々な文学の影響があることを示し、古英語文学の多面性を明らかにしている点で有益であることに疑いの余地はない。しかし、これらの研究で注意すべき点は、類似表現を根拠にしてある表現の典拠を導き出したとしても、その表現はあくまで作品全体の「部分」であるので、全体の流れに違和感なく合うことが必要となることである。特に、典拠が明確な宗教詩とは異なり、特定の典拠を持たないと考えられている *Beowulf* のような英雄詩に対しては、様々な側面から古英語文学、ラテン文学、聖書等からの影響を導き出そうと試みる議論が多くなされてきている。¹ しかし、これらの研究成果に求められることは、これらの典拠からの影響とされる個所が、*Beowulf* という作品全体の流れと違和感のない解釈ができることである。

上記のような研究の1つに、Daniel Anlezark の議論²がある。この論文で、彼は、古英詩 *Solomon and Saturn* にある Wulf という人物に関連する一節に描かれている場所と *Beowulf* に出てくる Grendel の棲家のある沼の描写との類似

1 特にラテン文学の古英詩への影響の研究をまとめたものに、Andy Orchard, *A Critical Companion to Beowulf*, (Cambridge: D. S. Brewer, 2003), pp. 132-6 がある。

2 Daniel Anlezark, 'Poisoned Places: the Avernian tradition in Old English poetry,' *Anglo-Saxon England* 36 (2007), pp. 103-126.

性に着目し、それらの場所を「毒のある場所」と考え、それぞれの個所にラテン文学の「地獄」と関連する‘Avernian tradition’の影響があることを論じている。³ *Solomon and Saturn* は、聖書からの名称に加え、東西の広範囲にわたる題材を扱っているため、それぞれの個所にラテン文学を典拠と考えられる個所が含まれている可能性は大いにある。⁴ それ故、この *Wulf* の一節にも、Anlezark が主張するようにラテン文学の‘Avernian tradition’の影響がある可能性は高い。これに対し、英雄詩である *Beowulf* は、その題材や詩の性質という点で *Solomon and Saturn* と異なっている。それにもかかわらず、両作品の表現の類似性のみを根拠に、*Beowulf* の一部にも同じラテン文学の影響があると考えることについては、*Beowulf* 全体からその妥当性について考察する必要があると思われる。

両作品の概当箇所には、「海を渡る者」、「Dragon を倒した者」という類似表現が存在していることは確かである。⁵ しかし、Anlezark の主張するラテン文学の影響の根拠となり、彼の論文の出発点となっている肝心の「毒」については、両作品の間に決定的な相違がある。*Solomon and Saturn* では、「毒」を表す語が用いられ、「人、鳥、地上の動物が入ることができない」(*Solomon and Saturn II* ll. 39-41)⁶ という描写があることから、そこが「毒のある場所」であることは

3 ‘[t]he presentation of these ‘poisonous places’ may indicate a literary debt in both poems to the Classical tradition of poisoned locales, broadly definable as the ‘Avernian’ tradition, available to Old English poets in a range of works including Latin epic poetry.’ (Daniel Anlezark, (2007), p. 104.)

4 この点、この作品は難解なことで知られている。Daniel Anlezark は、2009 年に、本作品の典拠を緻密な方法で割り出しながら、*Solomon and Saturn* の校訂本を約 50 年ぶりに出版した。Daniel Anlezark, ed. and trans., *The Old English Dialogues of Solomon and Saturn*, Anglo-Saxon Texts 7, (Cambridge: D. S. Brewer, 2009).

5 両作品にでてくる場所の類似点については、Daniel Anlezark, *Water and Fire: the Myth of the Flood in Anglo-Saxon England*, (Manchester: Manchester University Press, 2006), 特に pp. 311-333 に詳しい。また、*Beowulf* と *Solomon and Saturn* の類似点については Andy Orchard, *Pride and Prodigies: Studies in the Monsters of the Beowulf-Manuscript*, (Toronto: University of Toronto Press, 2003), pp. 83-4 にも詳しい。

6 *Solomon and Saturn* の行数は、Daniel Anlezark (2009) にもとづく。

*Beowulf*における「毒」：Grendelの沼は毒のある場所か？

わかる。これに対し、*Beowulf*にある Grendel の棲家のある沼の描写には「毒」を表す語は用いられていない。さらに、この場所に Beowulf、Hrothgar 王とその臣下らが足を踏み入れているが (*Beowulf*, ll. 1399-1441a)、彼らがこの場所の「毒」のために苦しんでいるという描写は存在していない。このような「毒」に対する描写に相違があるにもかかわらず、2つの古英詩の「毒」以外の点で類似する表現を根拠に、一方の作品にある「毒」を、もう一方の作品にもあるかのように読み込んだ上で、同じラテン文学の影響を見出すことについては疑問が残る。もし、*Beowulf*のこの個所に「毒」を見出し、同じラテン文学の影響を認めるのであれば、この影響が *Beowulf* 全体を通して然るべき役割を持ち、この部分の解釈にそれなりの影響を及ぼしているはずである。そこで、*Beowulf* で用いられている「毒」を確認しながら、この個所にテキストにはない「毒」を見出すことが作品全体からみて妥当であるのかを確認していきたい。

以下は、Grendel の棲家のある沼の描写である。

	Hie dygel lond
warigeað, wulfhleoþu,	windige næssas,
frecne fengelad,	ðær fyrgenstream
under næssa genipu	niþer gewiteð,
flod under foldan.	Nis þæt feor heonon
milgearnearces	þæt se mere standeð;
ofer þæm hongiað	hrinde bearwas,
wudu wyrstum fæst	wæter oferhelmað.
Þær mæg nihta gehwæm	niðwundor seon,
fyr on flode.	No þæs frod leofað
gumena bearna,	þæt þone grund wite;
Ðeah þe hæðstapa	hundum geswenced,
heorot hornum trum,	holtwudu sece,
feorran geflymed,	ær he feorh seleð,

aldor on ofre, ær he in wille
 hafelan [beorgan]; nis þæt heoru stow! (*Beowulf*, ll. 1357b-72)⁷

「彼らは隠れた土地、狼の棲まう丘、風の吹く絶壁、恐ろしい沼地に通ずる道に棲んでいる。そこでは、山川が、水が、絶壁の暗闇の下、土地の下へと流れ落ちている。ここより、かの沼のある処までは数マイルもない。霜で覆われたる木々が沼の上に垂れこめ、しかと根の張りたる木々が水を覆っている。そこにて、夜な夜な恐ろしくも不思議なもの、水上の炎を見ることができる。その底を知るほど知恵に恵まれたる者は、人の子の内には存在しない。荒地を駆けるもの、立派な角を備えたる鹿も、犬どもに追い立てられ、遠くから逃がれ、森にたどり着いたとしても、沼の中でその頭を守ろうとするより、むしろ岸の上で命、寿命を絶つという。そこはとてども心地のよからぬ場所である。」

ここは、犬に追いつめられた鹿ですら入ろうとしないほど不気味な場所である。⁸ また、同じ沼の描写がもう1箇所あり、上記の恐ろしい雰囲気描写に

7 *Beowulf*からの引用はすべて、Frederick Klaeber ed., *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, 3rd ed. with first and second supplements, (Lexington: D. C. Heath, 1950) にもとづく。ただし、マクロンなどの記号は省略してある。訳はすべて拙訳。

8 この不気味さを示す描写の一部が、*Blickling Homily XVI*にある「地獄の入口」の描写に類似していることから、ここを「地獄」と考える研究者もいる。この提案を最初に行ったのは、*the Blickling Homilies*を校訂したR. Morrisである。この地獄との類似性に関する他の研究については、Andy Orchard, (2003), pp. 157-8に詳しい。Anlezarkもこの個所の「地獄」のイメージに基づき、ラテン文学の‘Avernian’ traditionを結び付けようとしているのかもしれない。実際に、彼は他の場所で、この類似性に基づき、Grendelとその棲家を「地獄」のイメージを結び付けている (Anlezark, (2006), pp. 315-23)。しかし、この類似を認めながらも、John Nilesは、以下のように類似はあくまで類似であり、Grendelの棲家のある沼は「地獄」ではないことを指摘している：‘One is shown a landscape strangely reminiscent of hell’s mouth, inhabited by creatures strangely reminiscent of the demons of hell, but the resemblance never becomes an equation.’ John D. Niles, *Beowulf: The Poem and its Tradition*, (Cambridge: Harvard University Press, 1983), p. 19.

加え、この場所に数多くの水蛇 (*wyrmcynnnes fela / sellice sædracan* (1425b-26a)) がいることが述べられている。この Grendel の棲家のある沼に、Anlezark は、以下の2つの点に基づいて、テキストにはない「毒」を読み込んでいる。1つは、この場所に多く存在する「蛇」である。「蛇」が「毒」と強いつながりを持っていると Anglo-Saxon 人の間で考えられていたことは、当時の薬草学の文献にも「毒」と「蛇」との関連を示す記述が多く残っていることからわかる。⁹ この「蛇」の存在に加えて、この場所を「毒のある場所」と見なすもう1つの要素として、Grendel 自身が「毒を持つ悪霊」*ættren ellorgæst* (l. 1671a) と表現されていることがあげられている。

Anlezark は、これらの点を根拠として、Beowulf のテキストには実際に存在しない個所に「毒」を見出そうとしている。もしテキストにない個所にまで「毒」を読み込むのであれば、作品を通して Grendel が「毒」と相当強いつながりを持って描かれていることになる。そこで、Beowulf における「毒」を示す *attor* とその関連語について見ながら、Grendel が「毒」と強いつながりを持っているのかを見ていくことにする。

Beowulf において、*attor* の使用例は、その派生語と複合語を合わせても、5例¹⁰である。この点、*attor* の使用例自体は少ないと言わざるをえないが、作品の中心となる怪物が共にこの語の関連語で示されていることは注目に値す

9 'Although the adder is the only poisonous snake in this country [Anglo-Saxon England], other reptiles and toads were then —and usually are still— considered to be poisonous. The occurrence of so many prescriptions against the bites of adders and other reptiles may also perhaps indicate the extent to which this country was infected by them in Anglo-Saxon times, before it was cleared and drained and cultivated.' (Wilfrid Bonser, *The Medical Background of Anglo-Saxon England: A Study in History Psychology, and Folklore*, (London: The Wellcome Historical Medical Library, 1963), p. 282.) 古英詩 *Guthlac*, l. 912 は、「蛇」と「毒」とのつながりを示している。ただし、ここでは、「蛇」と「毒」は共にテキストに明示されている。詩人がこのつながりを明確にしたいのであれば、この例のように、テキストに両方の語が用いられているはずである。*Guthlac* の行数は、G. P. Krapp and E. V. K. Dobbie, eds., *The Exeter Book, The Anglo-Saxon Poetic Records III*, (New York: Columbia University Press, 1936) にもとづく。

る。まず、後半にでてくる Dragon が「毒を持つ敵」*attorsceaða* (l. 2839a) と表現されている。そして、Grendel と「毒」との関連を示す描写は以下のとおりである。

Ne nom he in þæm wicum, Weder-Geata leod,
maðmæhta ma, þeh he þær monige geseah,
buton þone hafelan ond þa hilt somod
since fage; sword ær gemealt,
forbarn brodenmæl; wæs þæt blod to þæs hat,
ættren ellorgæst, se þær inne swealt. (ll. 1612-17)

「数多くの宝物を目にしていたにもかかわらず、天候をものともしない民イェアート人の首領は、Grendel の頭と宝にて飾られたる柄以外は、その住処よりいかなる宝物も持ち去らなかつた。刀身はすでに溶けて、波状の入った剣はすっかり焼けていた。住処の内部で定命尽きているかの毒を持つ悪霊は、その血は、それほどまでに熱かったのである。」

Grendel の母親を倒した Beowulf は、そこで Grendel の死体を見つけ、持っていた剣で Grendel の首と胴体とを切り離した。その際に出た「毒」を含む Grendel の血が、その「熱」で剣を溶かしているという場面である。¹¹ このように、この作品では Grendel と Dragon が共に「毒」を持っていると述べられている。

しかし、Grendel と「毒」とをつなぐ唯一の例は上記のものであり、この作品における残りの *attor* の例は全て、Dragon との関連を示している。

10 このうち、l. 1459b の *atertanum* は、単語全体として「剣」を示す語と考えられている。この語の前半部は、*attor* の異綴りであるが、「剣」との関連については様々な見解が提案されている。R. D. Fulk, R. E. Bjork and J. D. Niles eds, *Klaeber's Beowulf and the Fight at Finnesburg*, 4th ed., based on the third edition with first and second supplements of *Beowulf and the Fight at Finnesburg*, edited by Fr. Klaeber, (Toronto: University of Toronto Press, 2008), p. 205 に詳しい。この例のように、この語を用いた複合語が武器を示す例は古英語作品に少なからず出てくる。

*Beowulf*における「毒」：Grendelの沼は毒のある場所か？

	‘Nolde ic sweord beran,
wæpen to wyrme,	gif ic wiste hu
wið ðam aglæcean	elles meahte
gylpe wiðgripan,	swa ic gio wið Grendle dyde;
ac ic ðær heaðufyres	hates wene,
[o]reðes ond attres ¹² ;	forðon ic me on hafu
bord ond byrnan.	(ll. 2518b-24a)

「以前 Grendel に対して行った時のように、もし我が他の手段で、堂々

11 *attor* という語について、Wiersma は以下のような説明をしている。

OE ATTOR is related to OS ÊTAR, ETTAR, OHG EITAR, ON EITAR, all meaning “poison.” This in turn is related to the Gr. *oîdos* “swelling.” The IE root is •OIDO-; the Prehistoric Ger. root •AITA-, or •AITRA- “poisonous swelling.” The OHG EIT “fire,” the MHG EITEN “to burn,” and the OE ÆD “funeral pyre” seem to indicate that ATTOR may have connotations of “burning poison,” as in adders and poisonous plants. (Stanley Marvin Wiersma, *A Linguistic Analysis of Words Referring to Monsters in Beowulf*, (University of Wisconsin diss., 1961), p. 423.)

また、Bosworth and Toller も同様のゲルマン語との関連を示した上で、この語に以下のような意味を与えている：‘*attor* then would seem to mean a *cause of burning, a pricking pain.*’ (Joseph Bosworth and T. Northcote Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary Based on the Manuscript Collections of Joseph Bosworth*, (Oxford: Oxford University Press, 1898))。ここから、古英語 *attor* は、その関連する他のゲルマン語から、原義として「熱を帯びた毒」という意であることがわかる。*Beowulf* 同様、他の古英語の作品においても、この語は、「炎」や「熱」と関連する語と共に用いられている。特筆に値する点は、その「熱」との関連から、「地獄」の描写に用いられていることである。例えば、*Guthlac* l. 668、*Christ and Satan* l. 40, 79, 128, 317 などである。ただし、これらの例では、全てこの語がテキストに存在した上で、地獄のイメージと結びつけられており、地獄の描写全てに *attor* があるというわけではない。その点、たとえ「地獄」と表現が類似していたとしても、Grendel の棲家のある沼に *attor* があるかどうかは作品全体の流れから考える必要がある。*Christ and Satan* の行数は、G. P. Krapp ed., *The Junius Manuscript, The Anglo-Saxon Poetic Records I*, (New York: Columbia University Press, 1931) にもとづく。

12 この個所は、写本では *hattres* となっているが、*attres* に改訂する見解が提案され、それ以降、この見解は、多くの校訂本で支持されている。ここでも、この読みに従って議論を進めていく。

とその敵に対し、いかに組打つことができるのかを知っているのであれば、Dragon に対し剣を、武器を携えることなどは思いもしないであろう。しかし、そこには戦の炎の熱、呼気と毒とがあると考えている。それゆえに、我は楯と鎧を身に付けているのだ。」

ここでは、Grendel とは武器や装備なしで戦ったが、今度の Dragon との戦いでは、その「炎」や「毒」から身を守るために楯や鎧を身につける必要があることが述べられている。ここから、Beowulf は、Grendel との戦いでは、たとえ敵が「毒」を持っていたとしても、その「毒」には全く警戒していなかった一方で、Dragon との戦いでは、「炎」と「毒」に警戒していることになる。このことから、Dragon の方が Grendel よりもその「毒」が強く、その分「毒」とのつながりが強いと言える。

また、他の例として以下のものがある。

	Da sio wund ongon,
þe him se eorðdraca	ær geworhte,
swelan ond swellan;	he þæt sona onfand,
þæt him on breostum	bealonið (e) weoll
attor on innan.	(ll. 2711b-15a)

「そして、先に、地に棲む Dragon が Beowulf に与えた傷が、燃えはじめ、膨れ始めた。Beowulf は直ちに己の胸の中で、その体の内側で、毒がじわじわと沸き立つのを悟った。」

ここは、Dragon との闘いの最中に Beowulf が受けた傷の描写である。Dragon はこの攻撃で、牙から「毒」を流し込み、この傷を与えたのである。この傷が Beowulf の致命傷となっていることから、Dragon の「毒」の威力が相当のものであったことがわかる。この点からも、Dragon の「毒」は、Grendel のものとはその威力、性質が異なっていることがわかる。

Beowulfにおける「毒」：Grendel の沼は毒のある場所か？

上記から、共に「毒」を持ってはいるが、その「毒」を示す *attor* は Grendel に対しては 1 例、Dragon に対しては 3 例用いられており、その使用回数に差があることがわかった。また、その内容から、Dragon は「毒」を戦いの際に用い、結果として Beowulf の命を奪っていることから、「毒」と強いつながりを持っていると言える。一方、Grendel と「毒」とのつながりはその主な特徴として描かれているのではなく、むしろ、付け加えられた特徴であるかのように思われる。このことは、そのつながりが初めて述べられている個所が、実際の戦いの場面ではなく、Dene 国で Grendel 一族との戦いの過程を Hrothgar 王に報告する直前にきていることからわかる。ここから Grendel は戦いでは「毒」を用いていないことがわかる。また Grendel と「毒」とのつながりが述べられるまでにも、Beowulf との戦いで腕をもがれ、自身の棲家に戻っていく際、Grendel の血の描写はあるが、その血に含まれているはずの「毒」については言及されていない。さらに、戦いでもがれた Grendel の腕は、Heorot の壁に戦利品として飾られているが、そこでもその腕に「毒」があることには触れられていない。このように、Grendel は、「毒」をその特徴として描かれているとは言いがたく、その分、「毒」とのつながりも弱いと言うことができる。

attor の使用回数とその内容の差に加えて、Grendel と Dragon の「毒」とのつながりの差は、この作品の Grendel の主な特徴を見ることでより明確になる。この作品を通して、Grendel とその母親の特徴として描かれているものは、彼らの「力」である。このことは、作品の至る所にある Grendel とその母親に対する表現から明らかである。Grendel は、「猛き悪霊」*ellengæst* (l. 86a) と表現され、さらに、「剛力で知られる彼」(*he mægnes rof* (l. 2084a)) と描写されている。そして、Grendel の母親も *mihtig manscaða* (l. 1339a) や *merewif migtig* (l. 1519a) と表現されている。これらの記述に加え、作品内の様々な描写から Grendel 一族と「力」との関連は明白である。また、Beowulf は Grendel との闘いのことを「異形の者の力を冒して参った」(*frecne geneðdon / eafod uncubes*. (ll. 959b-60a)) と述べていることから、Beowulf は Grendel の「力」と闘ったことを印象づけている。そして、両者はその「力」を張り合うかのように描かれていることを

指摘する研究者もいる。¹³

このように、Grendel 一族は「力」との強いつながりを作品の中で多く示されていた。これに対し、「毒」の場合とは異なり、Dragon は「力」とのつながりが弱く描かれていると言える。それは、Dragon の「力」に言及している個所が 1 例のみであり、その内容から Dragon に関しては、その「力」を特徴としていないことがわかる。以下が Dragon の「力」の唯一の言及個所である。

Oferhogode ða	hringa fengel
þæt he þone wifdlogan	weorode gesohte,
sidan herge;	no he him þa sæcce ondred,
ne him þæs wyrmes wig	for wiht dyde,
eafod ond ellen,	forðon he ær fela
nearo neðende	niða gedigde,
hildehlemma,	syððan he Hroðgares,
sigoreadig secg,	sele fælsode
ond æt guðe forgrap	Grendeles mægum
laðan cynnes.	(ll. 2345-54a)

「そして、宝環を分け与える王は、広く空を駆け巡るもの (Dragon) に対し、軍勢をもって、大軍をもって攻めることを潔よしとしなかった。彼はその闘いをいささかも恐れてはおらず、その Dragon の戦の能力、力と勇気をいささかも思いもしなかった。それは、彼がかつて困難に立ち向かいながらも、勝利に満ちた彼が、Hrothgar 王の館を清め、戦で憎き種族である Grendel 一族を粉碎して以来、数々の戦、格闘をくりぬけてきたからである。」

13 Ex. John Niles, (1983), p. 20: ‘In almost all respects, Beowulf measures well against Grendel. Grendel is a manlike monster with the strength to carry off thirty Danes at once, and Beowulf is a monster-like man with the strength to carry off thirty suits of armor at once.’

Beowulfにおける「毒」：Grendelの沼は毒のある場所か？

ここでは、これまで Beowulf が乗り越えてきた数々の戦に比べると、Dragon の「力」は恐れるに足らず、特別な考慮に値しないことが述べられている。Dragon の特徴として Beowulf が警戒しているものは、先に引用した個所 (ll. 2518b-24a) に含まれていたように、「炎」と「毒」であった。Dragon は、「炎」と「毒」とを主な特徴として描かれ、「力」に関しては重視されていないことになる。

このように見てくると、作品を通して、Dragon は「炎」と「毒」とのつながりをその特徴とし、「力」との関連を特徴としていなかったのに対し、Grendel 一族は「力」とのつながりをその特徴とし、「毒」との関連をその主な特徴としていないという構図が浮かび上がってくる。

この構図は、Grendel との戦に備える際と、Dragon との闘いに備える際の Beowulf の言動の差に見て取ることができる。この差は、まず、戦いの前の装備の違いに表れている。すでに見たように、Beowulf は Dragon との闘いの前には、その「熱」、「炎」そして「毒」を防ぐことができるように大きな鋼の楯を作らせており (ll. 2518b-24a)、実際の戦いでその楯を用いている。これに対し、Grendel との戦いの前に、彼は以下のような行動をしている。

Huru Geata leod georne truwode
modgan mægnes, Metodes hylde. —
Da he him of dyde isernbyrnan,
helm of hafelan, sealde his hyrsted sword,
irena cyst ombihtþegne,
ond gehealdan het hildegeatwe. (ll. 669-74)

「まことに、イェアート族の首領は、尊大な力を、神の恩寵を堅く信じていたのだ。そして、彼は鉄でできた鎖鎧を自身の体から外し、頭から兜を取り、彼の装飾された剣を、最上の鉄を従者へと渡した。そして、それらの物の具を護るように命じたのである。」

Beowulf は Grendel と武器や装備を一切身に付けずに戦いを挑もうとしている

のである。このように、戦いへの装備が異なっているのは、Grendel とはその「力」と対峙し、Dragon とはその「炎」と「毒」と対峙していることが深く関わっていると言える。

また、この差と関連し、ゲルマンの英雄の特徴の1つである戦いの前の「言挙げ」も変化している。上記の引用にあるように、戦いの前に装備を外した後に、Beowulf は言挙げ (*gylpworda sum* (l. 675b)) として以下のように述べている。

	ac wit on niht sculon
secge ofersittan,	gif he gesecean dear
wig ofer wæpen,	ond siþðan witig God
on swa hwæpere hond,	halig Dryhten,
mærðo deme,	swa him gemet þince. (ll. 683b-87)

「そうではなく、もし彼が武器なしで戦いをあえて求めるのであれば、夜中に我ら2人は剣を用いることを控えよう。さすれば、賢明なる神、聖なる主は、適切と思われるように、いずれかの手の上に栄誉を授けてくれよう。」

ここで、Beowulf は Grendel とは対等の条件で戦い、後は神の判断を待つ旨を述べている。Grendel との戦いの前に、上記のような「言挙げ」を行った Beowulf であるが、Dragon との戦いの前には、異なる単語で示されている「言挙げ」(*beotwordum* (l. 2510b)) を行っている。さらに、この言葉の最後で「我は心の中では勇敢であるが、戦を求め空駆けるもの (Dragon) に対し、言挙げは控えよう (*Ic eom on mode from, / þæt ic wið þone guðflogan / gylp ofersitte.* (ll. 2527b-8))」と述べている。Dragon との戦いの前には、「言挙げ」として、*beot* を行い、Grendel の戦いの際に行った *gielp* を控えているのである。これらの2つの「言挙げ」を意味する語の差を以下のように説明している研究者がいる。

*Beowulf*における「毒」：Grendel の沼は毒のある場所か？

The words *gylpword* and *beotword* thus seem to mean the same thing, but it is probable that *gielp-* stresses the glory of the adventure, something to boast of, whereas *beot-* stresses the fact that it is a promise, a vow.¹⁴

この考えに従えば、Beowulf は、Dragon との戦いを前に「言挙げ」をしてはいるが、Grendel との戦いの時とは異なり、勝利によって得られる栄光を強調していないことになる。これは、Dragon の特徴である「炎」と「毒」が、Grendel の「力」とまみえる時とは異なっていると Beowulf 自身が考えていると見ることが出来る。

Dragon が「熱」と「毒」を特徴とし、Grendel が「力」を特徴としている構図は、上記の Beowulf の言動の差に加え、作品全体の展開にもあてはまるように思える。作品の前半で Grendel の「力」と対峙した際には、Beowulf は自身の能力で打ち勝つことができた。一方、作品の後半で、Dragon の「炎」と「毒」と対峙した際には、Beowulf をもってしても 1 人ではそれらに打ち勝つことができず、臣下の Wiglaf の助けを借りた上で、自らの命と引き換えに Dragon を倒している。結果として、Beowulf は「武勇は (Dragon の) 命を追い払った」(*ferh ellen wræc* (l. 2706b)) と述べられ、彼は「力」で「毒」を制したことになるが、その代償も彼の命という大きなものとなっている。このような作品の前半と後半とでそれぞれの怪物が特徴とするものが異なっている構図が、Beowulf の戦いの結末にも関わっている。このことは、作品の前後半で語りの雰囲気それぞれの戦いの結末により異なっていることを指摘する研究にあてはめて考えることもできる。¹⁵ このように上記の構図は、作品全体の展開にもあてはまると思われる。

14 Stefán Einarsson, 'Old English *Beot* and Old Icelandic *Heitstrenging*,' J. B. Bessinger, Jr., and Stanley J. Kahrl eds., *Essential Articles for the Study of Old English Poetry*, (Hamden: Archon Books, (1968), p. 100.

15 Ex. 'The inevitability of the hero's death darkly distinguishes the final battle from both his earlier encounters; moreover the various narratives of part II concentrate insistently on the theme of death and make the significance of mortality central to the poem.' (George Clark, *Beowulf*, (Boston: Twayne Publishers, 1990), p. 122.)

これらのことを考慮に入れると、「毒」は、「炎」と共に Dragon の特徴として描かれており、また、Beowulf に致命傷を与えていることから、その最大の特徴と考えることもできる。これに対し、この作品を通して、Grendel はその「力」を主な特徴としており、「毒」に関しては、一度は言及されてはいるものの、そこまで強いつながりが示されているわけではなかった。このように作品全体の流れをみてくると、「毒」との関連がそこまで強くはない Grendel の棲家のある沼にあえてテキストに言及されていない「毒」を読み込む必要はなく、まして、ラテン文学の影響を考える必要はないとすることができる。むしろ、作品の流れに従えば、「毒」は Dragon の特徴としてのみ考慮すべきものとも言える。このように見てくると、Anlezark がその論文で指摘していた Beowulf に関する主張については、作品全体の構図のバランスを崩しかねないものになることからその妥当性を見出すことはできない。

古英語の作品にある表現の類似点を根拠に典拠を求めていく研究は、古英語文学の内外の関連性や影響を明らかにできることから重要な研究分野であることは疑う余地はない。しかし同時に、テキストにない部分にまで必要以上に読み込んでしまうと、作品の全体の流れとは不自然な解釈を導いてしまう危険も含むことになる。その点でも、個々の作品の流れを十分に考慮した上で、このような研究がなされていくことが必要であると思われる。

Works Cited

- Anlezark, Daniel, *Water and Fire: the Myth of the Flood in Anglo-Saxon England*, Manchester, Manchester University Press, 2006.
- Anlezark, Daniel, 'Poisoned Places: the Avernian tradition in Old English poetry,' *Anglo-Saxon England* 36 (2007), pp. 103-126.
- Anlezark, Daniel, ed. and trans. *The Old English Dialogues of Solomon and Saturn*, Anglo-Saxon Texts 7, Cambridge, D. S. Brewer, 2009.
- Bonser, Wilfrid, *The Medical Background of Anglo-Saxon England: A Study in History Psychology, and Folklore*, London, The Wellcome Historical Medical

Library, 1963.

Bosworth, Joseph and T. Northcote Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary Based on the Manuscript Collections of Joseph Bosworth*, Oxford, Oxford University Press, 1898.

Clark, George, *Beowulf*, Boston, Twayne Publishers, 1990.

Einarsson, Stefán, 'Old English *Beot* and Old Icelandic *Heitstrenging*.' in J. B. Bessinger, Jr., and Stanley J. Kahrl eds., *Essential Articles for the Study of Old English Poetry*, Hamden, Archon Books, 1968, pp. 99-123.

Fulk, R. D., R. E. Bjork and J. D. Niles, eds. *Klaeber's Beowulf and the Fight at Finnesburg*, 4th ed. based on the third edition with first and second supplements of *Beowulf and the Fight at Finnesburg*, edited by Fr. Klaeber, Toronto, University of Toronto Press, 2008.

Klaeber, Frederick, ed. *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, 3rd ed. with first and second supplements, Lexington, D. C. Heath, 1950.

Krapp, G. P., ed. *The Junius Manuscript*, The Anglo-Saxon Poetic Records I, New York, Columbia University Press, 1931.

Krapp, G. P. and E. V. K. Dobbie, eds. *The Exeter Book*, The Anglo-Saxon Poetic Records III, New York, Columbia University Press, 1936.

Niles, John, *Beowulf: The Poem and its Tradition*, Cambridge, Harvard University Press, 1983.

Orchard, Andy, *Pride and Prodigies: Studies in the Monsters of the Beowulf-Manuscript*, Toronto, University of Toronto Press, 2003.

Orchard, Andy, *A Critical Companion to Beowulf*, Cambridge, D. S. Brewer, 2003.

Wiersma, Stanley Marvin, *A Linguistic Analysis of Words Referring to Monsters in Beowulf*, University of Wisconsin diss., 1961.